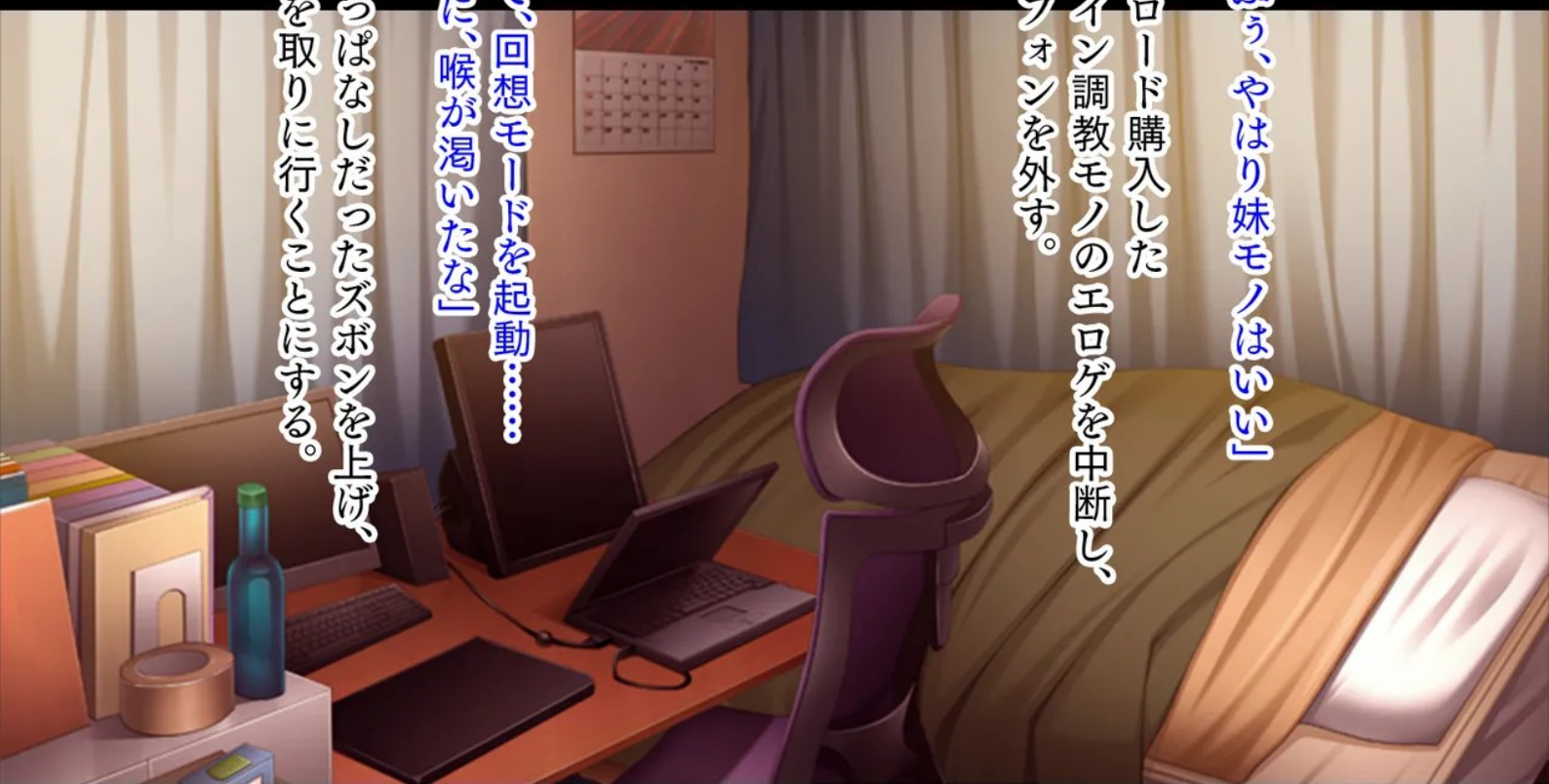


『……ふう、やはり妹モノはいい』

ダウンロード購入した
妹ヒロイン調教モノのエロゲを中断し、
ヘッドフォンを外す。

『さあで、回想モードを起動……
する前に、喉が渴いたな』

下ろしっぱなしだったズボンを上げ、
飲み物を取りに行くことにする。



「んぐっ、んぐっ……ぷはーっ♪ あ、おにーちゃんだ。
ゴハンじゃないのに部屋から出てくるとか珍しくない？」

リビングに入ると、ペットボトルのジュースを
ぐびぐびと飲んでいる妹の緒花がいた。

「喉が渴いたんだ。ちようどいい、ひと口くれよ」

「いーよ、でもひと口だけだからねっ」

「ありがとよ、はむっ！ んぐっ、んぐっ、んぐっ……!!」

ペットボトルを受け取ると同時に口をつけて、
一気に飲み干していく。



「ぶはあっ！ ふう、ごちそうさん」

「ごちそうさん、じゃないんだケドっ！
ひと口って言ったじゃんっ！
おにーちゃんのウソつき！」

「そんなもん嘘に決まってるだろ、
少しは学習しろよ」

「うううー……！ おにーちゃんのバカっ！ デブっ！
ヘンタイっ！ もーいい、わたし着替えてくるっ！」

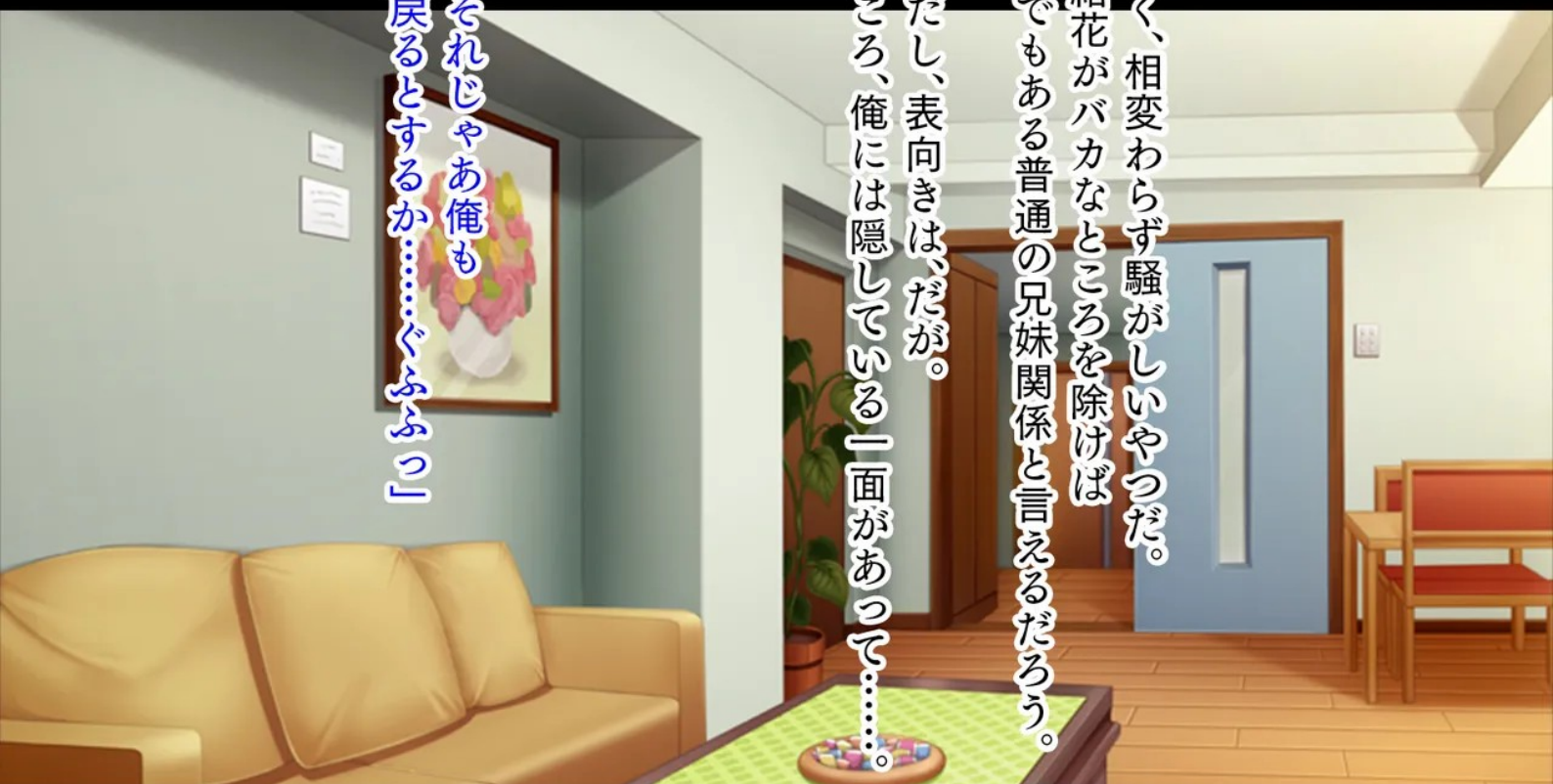
プンスカと肩を怒らせながら、
緒花がリビングを出ていく。



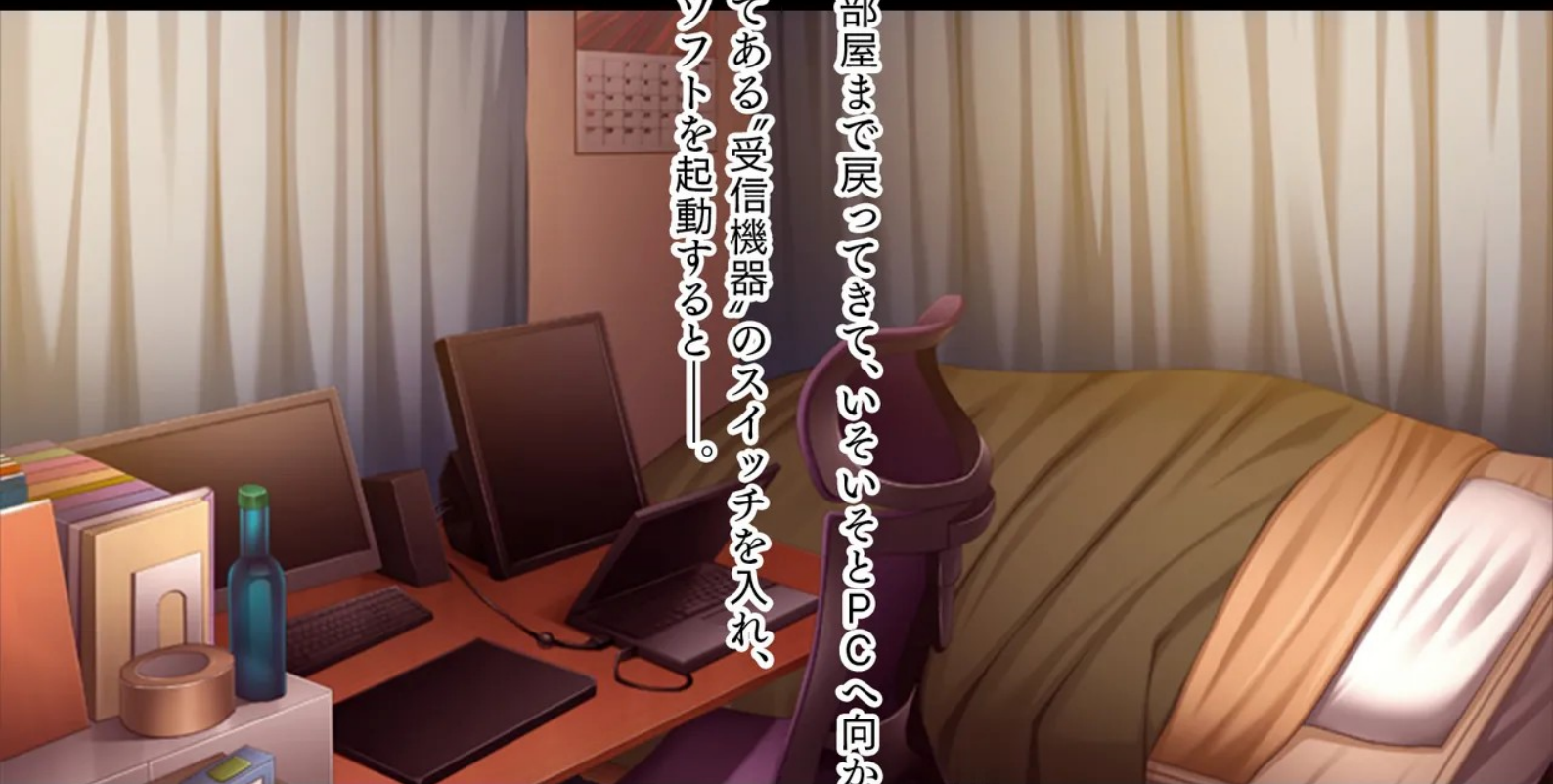
まったく、相変わらず騒がしいやつだ。
まあ、緒花がバカなところを除けば
どこにでもある普通の兄妹関係と言えるだろう。

……ただし、表向きは、だが。
実のところ、俺には隠している一面があつて……。

「よし、それじゃ俺も
部屋に戻るとするか……ぐふふっ」



早足で部屋まで戻ってきて、いそいそとPCに向かう。
接続してある「受信機器」のスイッチを入れ、
専用のソフトを起動すると――。



——ディスプレイに浮かびあがった、緒花の姿。
映っているのは、
壁ひとつを挟んだ向こうにある妹の部屋だ。

『ちあてと』

カチカチとマウスを操作して、映像の録画を開始する。
あとはヘッドフォンを装着して、と……。

MATUBIN

見での通り、これは盗撮映像だ。

もちろん、こんなことをしている理由はただ1つで……。



「ふい、ようやく脱げたー……」

「よし、いいぞお……はあ、はあ」

さっそくとばかりにズボンをずり下ろし、
肉棒を扱っていく。

ぱっ



「寒いからはやくタイツ穿こつと……あれ、どこいった？」

タイツを探すキヨロキヨロとした動きに合わせて、緒花の尻が左右に揺れる。

「ぐふふ、たまらんなあ……はあ、はあ」

ミロ
ミロ

できることなら、この下を見てみたいものなんだが……。



「あ、タイツ見つけー。んー、でもその前に……」

機嫌よくシコつていると、緒花がパンツに手をかけた。
こ、これはまさかっ……!!?



慌てて上体を前のめりにさせて、
ディスプレイに鼻がぶつかる程に顔を近づける。

『うわー、やっぱりベトベトお……
なんか最近オリモノ多いなあー……』

ぽっ



初めて見る妹のアソコに、こっちの興奮もうなぎ登りだ。
まだ遠かったはずの射精感が、グングンせり上がっていく。

「くう……！ やばい、そろそろっ……！」

「そだ、新しいのには
ナプキンつけよーつと
……んしょっ」

「くううっ……！
いくぞっ……！」



「はぁ、はぁ……」

淫乱



MATUBIN

少し目を離している隙に、
緒花は新しいパンツを穿いていた。

「あとはタイツも一つと……
んしょ、んしょ……」



ああっ、ハズてみたい……。



小悪魔になりたい妹に顔射

「たのもー!」

はっ

「おにーちゃんっ、わたし小悪魔ガールになりたいっ!」
「は、はあっ? なんだそりゃ?」



「それでね、おにーちゃんにお願いがあるんだケドっ」

「はあ？　なんだよ？」

「あのね、ダンスーキ見せてっ？
あとボツキとシャセーっ」

一瞬、何を言われたかわからずポカンとしてしまう。



……しかし、これはまたとないチャンスじゃないか？

「……いいだろう。見せてやつてもいいぞ」



「やったっ！ じゃー見せてっ、はやくはやくっ」

「よし、まずはそこに座れ」

俺は椅子ごとその正面に移動し、
ゆっくりとズボンを下ろした。

「おおおーっ、
これがダンサーキッ……」

ふふっ

「教科書に絵はあったけど……
うわあー、こーなってるんだー……♪」

その瞳は好奇心でキラキラと輝いており、
まさしく興味津々といった様子だ。



「これがボツキしておつきくなるんだっけ？」

「そうだぞ、それはもう大きくなるんだ」

「見たい見たい！
おにーちゃん、ボツキさせてっ？」



「うー、なんかドキドキしてきたかもっ……
おにーちゃん、まだっ？」

「も、もう少し待てっ」

せめて何か、オカズになるようなものがあれば
……そうだっ！



「よ、よし緒花。ちよつとお前のパンツ貸せ」

「うー……でも、それはそのー
……あうううー……」

かあ

何を恥ずかしがっているのかは知らないが、
待ってられない。



「ほら急げ、間に合わなくなるぞっ」

躊躇いを色濃く残したまま、
パジャマのスカート部分に手をつ突っ込む緒花。

「は、はい……でも、あんまり見ないでね……？」

そっと、小さな布を俺に差し出してきた。



「も、もうっ……あんまり見ないでっつてばあっ……」

「こ、これは……」

まだ温かいパンツの中央に、
カサカサ擦れる生理用ナプキンが鎮座している。

ゆちゃ



鼻先が触れそうな近さ嗅ぐたびに、
甘酸っぱい発酵乳製品のようなニオイが抜けていく。

「どれ……レロレロッ」



「ちよっ、なにやってんのっ……!!?
おにーちゃんキモいつ、キモいキモいキモいーっ……!」

れろっ
れろっ

くっ
くっ

「う、うううっ……マジありえないっでええ……
おにーちゃんの、ヘンタイいっ……」

「はあっ、はあっ……」

「レロレロ……たまらんっ……」

抑えつけられていた興奮が
どんどん大きくなっていき――。



「え、えええつ……!? おにーちゃんつ、
コレなんかいきなりおつきくなつたんだケドっ」

びん

「お、おお! よし、これが勃起だっ」

「そ、そうなんだっ……うわぁ……」

「ぐふふっ、もつとよく見てもいいんだぞ」

「う、うん……ええつと、ニオイは……くさっ!？」

「くんくん……うええっ、なにこれー……
ポツキしたダンサーキってこんなにクサいんだー……!」



「はあ、はあ……よし、そろそろ触ってみろ」

「えっ!? さ、触るのっ?
えっ、コレにっ?」

でん

「ああ、いいぞ。好きにやってみろ」

「う、うん……それじゃ、ちよつとだけ……」



「うわあ、なんか熱くてカタいつ……
こんな風になってるんだっ……？」

「は、ははは、まあな……」

ちよつと触られただけで、
自分でも予想以上の快感だった。



「うわあつ、チョー動いてるー……♪ おにーちゃん、
もしかしてこれって気持ちいいーってことなの……?」

「あ、ああ、そうだぞ」

「へー、ギュツするだけでも気持ちいいんだー……
えいっ、えいっ……♪」

「緒花、もっと擦るスピードを上げるんだ。
手首のスナップを利かせる感じで、こう、クイクイツと」



「えっと、こんな感じ……？
よっ、ほっ、とりやつ……！」

「お、おおっ……そうだ、
そんな感じでっ……くうっ」

「おーっ、なんかわかってきたかもっ……♪
えいっ、えいえいえいっ……♪」



「うわっ！ なんか先つばから出てきたーっ♪
おにーちゃん、これなにっ？」

「射精が近い目印みたいなのだっ……くうっ」

「そーなのっ？ それじゃ、もうすぐ射精するんだっ？
じゃあもつとしちゃおとっ♪ えいえいえいっ♪」
「おおっ、それヤバっ……はあっ、あああっ……！」



本格的に、射精の欲求が高まってくる。



「はあっ、はあっ……！　いくぞ、緒花っ……！
射精、見せてやるからなっ……！」

「うんっ　おにーちゃんのシャセーっ、見せてっっ」

「あれ、なんか先っぽがプクッてきたかもっ♪
おにーちゃん、これってもしかして出そうなのっ？」

「ああっ、もう出るぞっ………！
顔を近づけろっ………！」

「顔？ えーつと、こんな感じっ？」
「ぐうぐうっ！ 出るっ！」





「うわわっ、なんか出てきたっ……!!?
ひゃんっ、なにっ、なにになっ……!!?

「これが、射精だっ……!!
くううっ……!!」

!?

びゅっ

びゅっ

「なんかあったかくてお風呂のお湯みたいっ……
んっ……!」
「すごっ、まだ出てるっ……!」

「ああっ、まだ出るぞおっ……!」

それはもうたつぷりと、緒花に顔射してやった。



「おおー、チヨーーいっばい……えーつと、
シャセーして出てきたからこれがセーエキなんだよね？」

「はあ、はあ……ああ、そうだぞ」



「へえー、そーなんだー……くんくん……
おお、なんかヘンなニオイがするー……」

ドロリと垂れる精液の感触に、
緒花がキョトンとした表情を浮かべている。

なんというか、純粹に興味津々といった様子だ。





ここまでされて、
嫌がる素振りすら見せないとは……。

もしかして、コイツにはもつと凄いことをしても
文句を言わないんじゃないか……？

そう思った俺は、妹を小悪魔ガールにすべく
エッチな特訓を開始させる——。

処女の妹と初エッチ

「あー……なんか、ドキドキしてきたかも……えへへ」

「……最後にもう一回だけ確認だが、本当にいいんだな？」

「う、うん……ダイジョーブ、だと思う……」



だんだん緊張が増してきたのか、
緒花がモジモジしながら見つめてくる。

「よおし、じゃあさっそくやろうか」

緒花の意思を再確認したところで、グイッと引き寄せる。

「ひゃんっ……!!? お、おにーちゃん……? え、ええっ……なにをするの……?」

いきなりセックスもいいが、この小さな唇にむしゃぶりついてやりたい。

「え、ええっ……? でも、

キスって好きな人とだけするものじゃないのっ……?」

兄妹セックスは大丈夫なくせにキスは嫌がるなんて、相変わずどこかズレたやつだ。



「うう……おにーちゃんロクサいし、
マジでやなんだケドお……」

まだ完全に踏ん切りはついてないようだが、
それでも覚悟だけは決めたようだ。

「ぐふっ……よし、口開けろ」



「んあっ……!!? ははひひへふほっ……? ふあっ……んっ、んんうーっ……」

緒花が、プルプルと耐えながら唾液の感触に耐えていく。

「よおし、こんなもんだろ……もつと口開けてみる」



俺の唾液がたつぷりと溜まっていた。
俺の言いつけ通り、しっかりと溜めていたようだ。

「それじゃあ、それを……そうだな、まずは味わってみろ」

「ん……ネチヨ、グチュ……レロ、ニユプ……」

「どうだ、美味いか？」



「いはあり……ふあ、のどろきー」

「おにひゃんぐむ、とむくららーの」

「お、おお……くらぞ」



「うえー……おにーちゃんのヨダレ、
飲んじやったしー……気持ちわるい……」

「ぐふふっ……よし、

じゃあ次は実際にやってみるぞ。背伸びしてへろ伸ばせ」

「うう、やんなきゃダメなんだよねー……んあー……」

緒花が、その小さな舌を伸ばしながらクイツと背伸びする。



「んんっ……!!? おにーひゃっ、んんっ……
ベロ、当たっへるんらけるっ……!!」

「気持ちよくしてやるから大人しくしてろ……」

「んはっ……こんなのれ、気持ちよくなんへっ……
れる、んふうっ……」

逃げようとする緒花の舌を絡めとってゆく。



「んんっ……ふはあっ、なに、これえ……
れろ、ちゅ……なんか、変っ……」

「どうだ、気持ちいいだろう？ れろ、ちゅば」

「れりゅ、ちゅっ……わかんないけおっ……
ペロがくすぐったくて、ゾクゾクするっ……ちゅるっ」

スツと、緒花の尻へと手を伸ばす。



緒花の小さな舌と唾液を味わいながら、
その尻をムニユムニユと揉みしだいていく。

「ふあっ、ああっ……おにーひゃん、
おひり、さわりしゅぎいっ……ふあっ、んむう……」





キスと愛撫を夢中で続けていると――。

「んんむうつ!? れろつ、ちゅるつ……
ぶはっ、ふあっ、あっ……れろれる、ちゅるりゅっ……」

まいこ

まいこ



「ふあっ、あああああっ……!!」

ぐい

ぐい

シヤッ

ぐい

ぐい

「ふああっ……!?!」

「ぐふふっ、たまらんなあっ……れろ、れろれろっ!」

がしゅっ

がしゅっ

「おにーひゃっ、いまはっ、らめえっ……
れろ、ちゅぱっ……んふうあっ、ふあああっ……!」

これだけ準備が整えば、もういいだろう。

「ふはあっ……!! はあ、はあ……
なに、いまのお……頭のなか真っ白になった……」

「なんだ、まだイッたことなかったのか?」

「イク……? 今のが、イクってゆーやつなの……?」



「はあ、はあ……おにーちゃん……わたし、
なんかアソコがムズムズする……これって、
イッたからなの……？」

「よし、今から俺が言う通りのポーズを取れよ」

緒花に指示を細かく出し、
俺はビデオカメラの電源を入れた。



「えへへ……ぴーすっ」

「ぶよーし……まずは自己紹介してみろ」

ドサッ

「自己紹介？ えーっと、吾妹緒花でーす」
「シュミはカラオケでー、特技はとくにありませんっ」



「えーっとー……今日は、わたしのヴァージンを
おにーちゃんにプレゼントしまーすっ」

「このカメラは記念撮影らしくて、
わたしがおにーちゃんとエッチして
処女を卒業するところを
バッチリ残すためにやってまーす」

「じゃあ、これから兄妹セックスを撮影するような
いけないワレメちゃんを確認さえてもらおうかな？」



「えへへ……ヤバイ、なんかチョーハズい……」

「お、おお……素晴らしいっ……!」

くぱあ

まともな毛が1本も生えていない見事なツルツル具合だ。
これが、妹の処女ワレメ。



「つてゆーか、はやくしよー……?」
「なんか、この体勢疲れてきちゃったんだケドー……」

「あ、ああ……そうだな」

「そうだ、今回の目的は
緒花のアソコを撮影することじゃない。
俺は今から、もっといいものを貰うんだ。」



さあ、挿れるぞっ……!!

「おにーちゃん、コンドームは……?」
「つけないと赤ちゃんできちゃうよー……?」
「……チッ。すまん、忘れてた」



超薄タイプのコンドームを装着する。

「……これでよし。それじゃ、改めていくぞ？」

「うん、いーよー……♪ はい……♪」

緒花が、処女ワレメに挿れやすいようにと腰を軽く上げる。
そこに亀頭の先端をクチュリと当てて、
そのままググッと腰に力を入れていき――。



「あぐうっ!? んんっ、くうううううううううう……!」

「くおおっ!? キ、キツイっ……!」

ブチッと何かを破ったような感触の瞬間、
肉棒が押し潰されそうなほどの膣圧に襲われる。



「んううううっ……!!
ぜんぶっ、入ったのおっ……??」

「はいや、まだだ」

力づくでメリメリとこじ開けるような感じで、
緒花の無毛ワレメに肉棒を埋めていく。



「くうううっ……!? い、痛っ……んんっ、くっ、ふうんうううっ……!」

「はあ、はあ……は、入った……」

「んっ、くううっ……
ぜ、ぜんぶっ……入ったのっ……?」

「ああ、入ったぞ……あ、ああ……
よおし……動くぞっ……」

ずぶぶ!!

めー
めー



「はあっ、ああっ……あ、あれっ……？
痛い、んだけど……んうっ……なんか……あっ、あっ……」

「はあっ……あっ、ああっ……おにー、ちやあんっ……
なんか、わたしっ……アソコ、おかしーかもっ……」

△
ぶっ

△
ぶう



「まさか、もう感じてるのか?」

「わかんないけどっ……ふあっ……ヒリヒリするのに、ソクソクも、しててっ……あっ、あっ……」

「なに、これえっ……ふあっ、ああっ……ヘンな声、出ちゃううっ……はあっ、ああっ……」



「おにー、ちゃあんっ……んあっ！
わたしっ、これダメかもおっ……んはあっ……！」

「こんなの、ゼツタイどっかヘンになるうっ……
あっ、ああっ……！」

「おにーちゃんっ、ビクビクしてるうっ……
これっ、気持ちいいっ、あっ、あああっ……！」



「きゃあんっ!? やあっ、なにこれえっ!
ああんっ、ああっ、あああんっ、ああああんっ!」

「へうっ!? 締まるっ!」

「これっ、マジでっ、ヤバイってえっ!
おにーちゃんのがズンッて響いてっ、
頭、バカになっちゃううっ!」



「ああんっ！ きゃんっ！ ああんっ！
ひゃんっ！ ひはああっ、ああああんっ！」

「ああんっ！ もう、ダメエツ！
きゃんっ、あはあんっ！
わたしっ、またっ、きてるうっ！
ヤバイくらいおっきーのきちやつてるうっ！」

「ああっ、イクっ、イクっ、イクううううっ！！
あっ、あああああああああああっ……！！」

ズッ
ぐほ
にゅ
ぐほ
ずい





ああああ

「あああああああああああつ……!!」

ボクッ

ボクッ

グッ

グッ

グッ



「おにーちゃんのこと、奥でビクビクしてるううっ……!!
それっ、きもちいつ、あっ、あああああっ……!!」

「ぐうううっ……たまるんっ……!!」

こんなの、一回だけじゃ終わらせられない……!!

「続けていくぞ、緒花っ」

……そうして、夢中で緒花とセックスをしまくり。
ふと気づいた頃には、すでに外は暗くなっていた。



「はあー……はあー……えへへ、
いえーい……♪ 処女、卒業したよー……♪」

「緒花、初セックスの感想を言ってみろ」

「おは」

「おは」

「えーつとお……はあ、はあ……
おにーちゃんがすごすぎて、
よくわかんなかったあ……♪」



「なんだ、気持ちよくなかったのか？」

「もー、気持ちよかったに決まってるじゃーん……♪
こんなの、ハマっちゃうかもって思ったよお……♪」

「これから毎日い……」

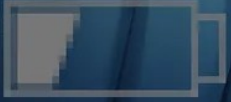
「おにーちゃんと兄妹セックス、頑張りまーす……♪」

「これは、本当にハマったようだな。」



●REC

ぐふふっ、処女じゃなくなったし
これでエッチの特訓を始められるな。
頑張ろうなあ緒花。



夜中に妹とチアコスで特訓

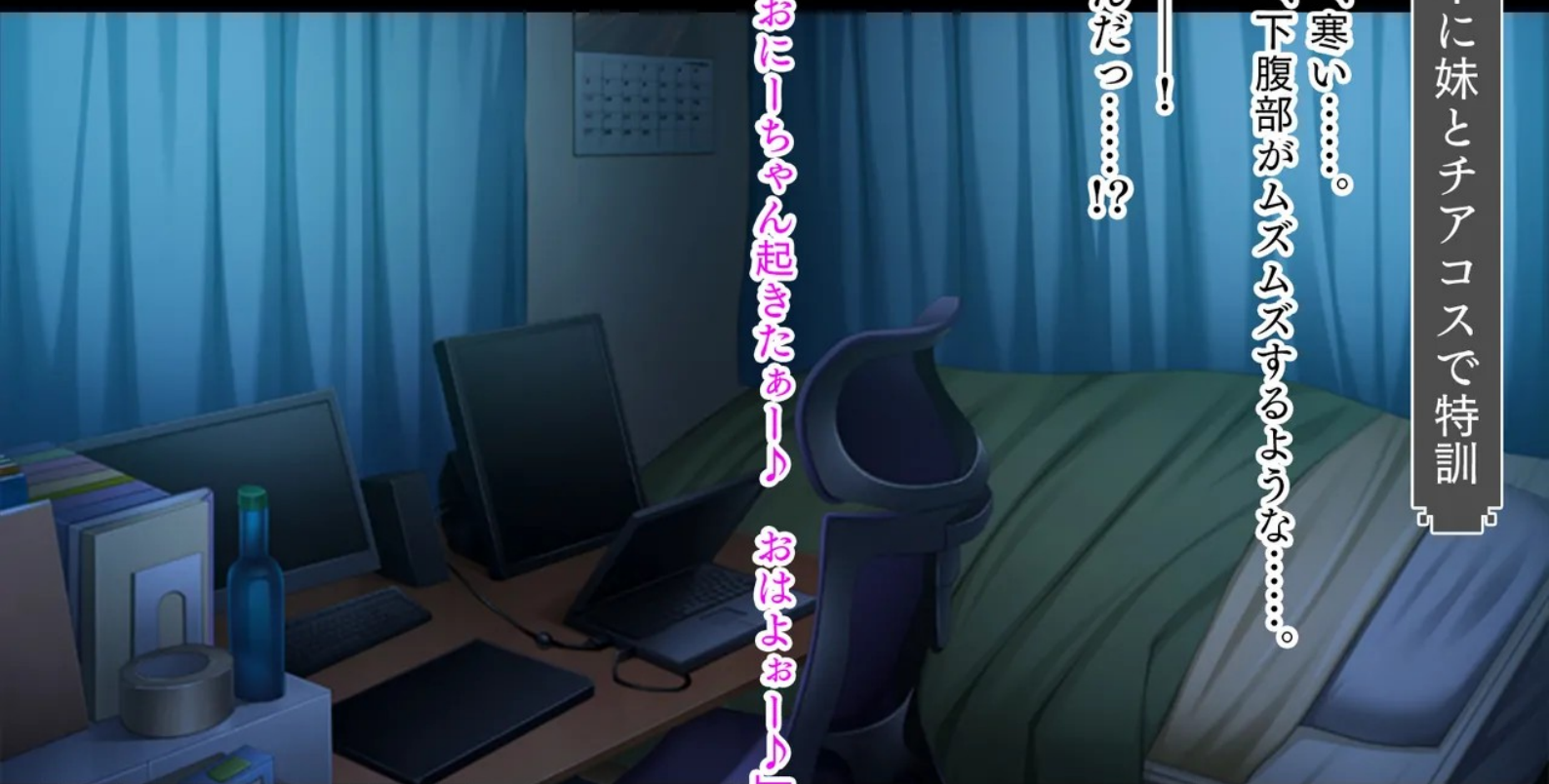
なんか、寒い……。

それに、下腹部がムズムズするような……。

ズシッ――！

な、なんだっ……!!?

「あー、おにーちゃん起きたあー」 おはよおー」



「お、おいつ……お前、何やってんだっ?」

「えー、なあーにがあー?」

「ねえー、エッチのトクンしよおーよおー♪
エッチしよおーよおー、ほらほらあー♪」

ヌルヌルッと、緒花がアソコを俺のモノに押しつけてくる。
……この感触、まさかコイツ穿いてない？

「というか、なんなんだよその格好は……」



「だって、オトコの人ってこーゆーの好きなんですよー？
学校でも、みーんなエッチな目で見てくるしいー♪」

「この格好でエッチさせたげるからあー、
トククンしよおー？」

「あー」

「勃起しそうにないから無理だ……
というか寝かせろ」

「ふーん……じゃあ、ボツキさせちゃうもんねえー♪」

くにくに

「んふふー♪ こーやって、おっぱい見せながらあー……
こうだーっ♪」

「えいつ、えいつ……♪
おつきくなーれ、おつきくなーれ……♪」

緒花が身体を揺らすたび、
愚息にニユルニユルと愛液が絡みついでくる。
コイツ、もうかなり濡れてるようだ。

あー

あー

あー

「んふふー……♪
ちよつとずつおつきくなってきたー……♪
ほら、もつともつとおー……♪ えい、えーい……♪」

「ボツキ、ボツキー……♪
はやくつ、はーやー……♪」

「くぐう……これは、なまら……♪」

ズリズリ



「んー、あんまりおつきくケド……
ま、コレでいっかー」

3131

緒花のやつは
中途半端に少しだけ固くなったモノを膣口に当てがい、
そのまま腰を落としてきて――。





「あはあああつ……♪
おにーちゃんの、きたああ……♪」

やっ

はっ

「はああ……♪
おにーちゃんの、熱くて気持ちいい……♪」

ALP

「それじゃあー……せつかくこの格好してるしいー、
応援したげるねえー……♪」

「ボッキつ、ボッキつ、ボッキしてっ……
わたしのアソコで、シャセーしてっ……♪」



愛液まみれの膣肉が、
半勃起の肉棒をヌルヌルと扱ってくる。

「あはああつ……」 おにーちゃんの、
ちよつとずつおつきくなってきたあー……」

「アソコ、パンパンに広がっちゃったあ……」
ねえおにーちゃん、このままエッチしていいー……？
ってゆーかしちゃうねえー……」

「お、おらっ」



「あつ、あつ、あつ……おにーちゃんのこと、
擦れるうっ……！」 あつ、あああんっ……！」

「気持ち、いーよおっ……あんっ、ああんっ……！」
奥っ、ズンズンっで届いてるうっ……
あつ、あはあつ……！」

「ちよつとストツプッ……くううっ」

「これスキっ、ここスキなのおっ……
あんっ、ああんっ……！」 奥っ、感じちゃううっ……！」



「くはっ……やばいっ……!」

「あんっ、ああっ……おにーちゃんの、
気持ちいいーよおっ……はあっ、あんっ、ああっ……!」

「くうっ……こうなったら、俺も動くぞっ」

弾んでいる緒花の動きに合わせて、下から突き上げていく。



「きゃあんっ!? ああっ、深いっ!
あんっ、あああっ、あああんっ!」

「これが欲しかったんだろっ!
おらっ、おらっ!」

はっ

わっ

「しゅごっ、しゅごっ!」
頭の奥まで、ズンズンって響いちゃってるうっ!
あんっ、きゃああんっ!」

「どうだ、気持ちいいかっ!」

ん

ぱん! ぱん!
ぱん! ぱん!
ぱん! ぱん!

「いいっ、気持ちいいーのおっ！ あんっ、あああんっ！
おにーちゃんのが突き刺さってっ、
感じちゃってるのおっ！」

「くはっ!? めちゃくちゃ締まるっ……っ！」

「もっとおっ、もっとしてえっ！
もっとおっ、おにーちゃんペニスでズンズンしてえっ！」

「ああ、くらぐらぐらでっやるよっー！」



「ああんっ！ それっ、ヤバっ、ヤバいいっ！
わたひのアソコっ、ビクビクッてイッちやううっ！」

いっ

「ひああああんっ!? らめっ、らめえっ！
こんなに激しーのっ、子宮が喜んじやううっ！
おにーちゃんザーメンっ、ほしくなっちやうからあっ！」

あ

おちや...
おちや...
おちや...



「あはあああああああああつ!!」

ピクッ!

ピクッ!

ああ!!

ぴゅー

セリッ

緒花の絶頂に合わせて、思いつきり子種を解き放つてやる。

「あはああつ！ きてりゅつ、きてりゅつ！
おにーひゃんザーメシつ、ビュービューつて当たつてつ、
イッてりゅううつ！ あつ、ああああああつ！」

おおっ

「くうううつ、搾り取られるっ………!？」



「はぁーっ……はぁーっ……♪
おにーちゃんので、お腹いっぱい……♪」

おにー

はーっ

「ねえ、おにーちゃん……まだ、できるでしょおー……？」

「わたし、まだ足りないよおー……
もっかい……ううん、もっくらっぱらしよおー……♪」



「ほらあ、またおつきくなってきたー……♪
ね、もつとしよお……？ わたしのアソコお、
おにーちゃんのザーメンもつとほしがつてるよおー……」

(3/3)

「くうっ……こうなったら、やけだっ！」

ここまで求められては黙ってられない。いつそのこと、
とことんまで付き合ってやろうじゃないか！





休憩がてら怒張を抜くことすら許されず、
ただひたすらに緒花とセックスを続けて……。
緒花が満足した頃には、
もうすぐ明け方という時間になってしまっていた。

妹と校舎裏でセックス

「ふふふふ……はやく」

腕を引かれるまま、やってきたのは、学校の敷地内だ。
誰も使っていない裏門から入り、
校舎裏まで連れてこられた。

「おにーちゃあ……ここなら、誰もこないよお……？」

しゃがんで、緒花のすぐ正面に跪く。
すると、緒花はゆつくりとスカートを上げていき……。



「はあ、はあ……見て、おにーちゃん……
わたし、こんなになっちゃったあー……♪」

「おいおい、
こんなに濡らしてるのかよ?」

「うん……♪ 教室でもずーっと濡れちゃってで
掃除中とかチョータイヘンだった……♪」

はっ



「ねえ、おにーちゃん……
これ、どーにかしてえー……?」

「ああ、いーぞ……ぐふふっ」

緒花のアソコに顔を近づける。



「ハロー……ハロー……」

は

「あんっ……」

「それ、イイっ……はあっ、ああっ……」

れろっ

れろっ

れろっ

ん

「あっ、あっ……」
「ペロペロされるの、サイコーおっ……んっ……あっ……ああっ……」

れろっ

「んっ、あっ……あんっ……♪ はあ、はあ……ねー、
おにーちゃん……クリトリス、舐めてえ……？」

「緒花、お前が自分で触ってみろよ」



「んー、しよーがないなあ……♪
それじゃ、ちよつとただけだよお……っ」



緒花はあつさりと了承する。
そして、スカートを持っていない方の手を動かして……。

「んんっ……！ うわぁ……わたしのクリトリス、
チョー大きくなってる……」

あ

そのまま、恐る恐るといった感じでスリスリと擦りだす。

「んんっ……たぶん、こんな感じだよね……はぁ、あっ……」



「あつ、あつ……この触り方、
気持ちいいっ……んんっ、はあつ、ああつ……」

「ここ、学校なのにつ……オナニーしながら、
気持ちよくなっちゃってるうっ……」

「本当に、すっかり
エロくなつたなあ緒花は」

「見ているだけにしようかと思っていたが、
もう我慢の限界だ。
たっぷり溢れる濃厚な蜜に、舌を伸ばしてやる。」



俺の舌が触れた瞬間、緒花の腰が大きく跳ねた。

「あんっ、あはあっ……ダメ、だってばあっ……!!
オナニーしてるときに舐めるなんて、
感じすぎちゃううっ……あん、ひあんっ……!!」

「いいぞ、もっと感じてみろっ」

「あんっ、あっ……マジでっ、
こんなのダメだってばあっ……あっ、あんっ……!!
これじゃっ………すぐ、きちゃううっ……!!」



疼いていたこともあつてか、
早くも高まつてきているようだ。

「ぐふふっ、ここも可愛がつてやううっ!」

「ひゃんっ……!!? やつ、おしっこの穴、
なんか動いてるうっ……!!? あっ、ああああっ……!」

突出しているストロー部分を、
強めにグリグリと舐めていく。





「なにっ、これえっ……おしっこの穴、ソクソクしてるうっ……! あんっ、ああんっ……!-」

「もうダメえっ……! おにーちゃんに、おしっこの穴イジメられながらあっ……! イッちゃううううううっ……!-」

じゅが

ちゅぽ

じゅが

ちゅぽ

ぞくぞく



「あああああああああああああああああつ……!」

おあおあ

ピクッ!

ピクッ!

プシヤッ
プシヤッ

プシヤッ! (Pshya!)

尿道口へと繋がる突起を刺激してやると、
すぐにまた潮が噴出してくる。



「ひあんっ……!! ダ、ダメえっ……!!
イッてるのにつ、そんなにされたらっ……
おしっこ、出ちゃううっ……!!」

おあっ

はっ

れろっ

「いいぞ、このまま飲んでやるっ!
レロっ、レロレロっ!」

いきなり緒花の身体からフッと力が抜けて……。



「あ、あああ……ホントに出ちゃったあ……」

やっ

は

じゅぽぽぽぽ

ぽぽぽぽ……

「おにーちゃんに飲まれちゃってるのに、止まらないよお……」 ああ、はあああ……」



「美味いぞ、緒花あつ……んぐっくくくく」



「……よし、壁に手をつけて尻を向けろ」

「はあ、はあ……ねえおにーちやあん、挿れてえ……?」

「はあ」

「はあ」

「はあ」

「いいのかよ、学校だぞ?」



「だってえ、ここまでしたの、おにーちゃんだよお……？
ちゃあんど、責任とってトクンしてえ……？」

はー♡

「いいぞ、挿れてやろうじゃないか」

「うんっ……きてえー……っ」

ズイッと、緒花が尻をもつと突き出してくる。
俺はズボンをずり下ろしながら、その尻に近づき――。





「あ、ああああつ……
熱いの、きたあつ……」

ふんふん

は

は

「んっ、あはあっ……いいっ……太いの、
いっぱい動いてるうっ……あんっ、ああっ……♪」

「おいっ、あまり声をあげるなよっ？」

「そんなのっ、ムリだよおっ……あんっ、あはあっ……
だってっ、気持ちいいんだもおんっ……ああんっ……♪」



「おにーちやあんっ……もつと強いのでえっ……？
あんっ、ああんっ……こんなゆっくりだと、
物足りないよおっ……んはあんっ……♪」

あ

や

「少し待て。……おお、これは」

鞆の中に入っていたのは、3本のアナルバイブだ。
ちようにいい、これを使つてやるか。



「ひあうっ……!!? やっ……な、なにっ……?」

「寂しそうだったんであ。こっちも好きだろう?」



「あうっ、ああっ……なに、これえっ……
はあっ、ああっ……わたしっ、
こんなの知らないっ……ああっ……！」

「大丈夫、慣れればすぐによくなる」

「そんなこと、言われてもおっ……
ふあっ、ああっ……だめえっ、なんか、
ムズムズくるうっ……あああっ……！」



「これ、ヤバいつ、かもおつ……♪
なんかっ、チョー感じてきてるうっ……♪」

「お尻とアソコ、いっしょに入ってるのっ……
気持ち、いいっ……ふぁあっ……♪」
「よおし、だったら追加だっ」



「あつ、あああああーっ……!!」

やっ

いっ

「よし、このまま激しくいくぞっ！」

「ひあああんっ……!!」
「待ってっ、これヤバいっ……!!」



速く大きなストロークと交互に、
アナルバイブたちも抜き差ししていく。

「ひあああんっ……!! お尻とアソコっ、
いっしょにズブズブされるの気持ちいいーよおっ……!!」



「それっ、それしゅごいっ！
ああんっ、ひゃああんっ、きゃああんっ！
頭のなかつ、真っ白になるうっ！」

「おにーちゃんもきてっ、出してえっ！
学校でっ、中出しでっ、イカせてええっ！」

「くうううっ！ いくぞっ！ 出すぞっ！」



「あああああああああああああああああつ!!」

お
あ
あ
あ
あ



「くはあああああつ！ 出るううつ！」

「あ、あああああつ……!!
これっ、ヤバっ、ヤバいつてえええつ……!!」

おあっ

ぐい
ぐい

ぐわあ

ぐい

びゅるるる
びゅる

びゅるるるる

「あああつ、ふああああつ……!!
中出しされながらっ、お尻っ、感じちゃうううっ……!!」

緒花のやつは絶頂が長引いているようで、
ガクガクとした痙攣は止まらない。

「はぁ、はぁ……また、いっぱい出たね……」

「はぁ」

「はぁ」

「シロ」

「どうだ、満足したか？」





ウツトリとした様子で微笑みながら、頷く緒花。

そのエロい表情に、出したばかりの肉棒が
ピクリと反応してしまいそうになるが……。

さすがにここでこれ以上の行為はまずいと思い直し、
俺は鞆からティッシュを取りだすのだった。

電話中の妹とセックス

「何を悩んでるんだよ」

「実は今日、クラスの男子にコクられちゃって……」

「わたし、コクられたのなんて初めてだし……
もう、どーすればいいーかわかんなくて……」

言いながらまた悩んできたのか、緒花がしゅんと落ち込む。



「……そうだな、一度OKして付き合ってしまえ。
そして頃合いを見て別れる」

「でも……それって、なんかビドくない……?」

「おいおい、小悪魔ガールになりたいんだろう?
何人もの男を手玉に取れるくらいじゃなくてどうする?」



「あ、そつか……そうだよな、
じゃあわたし、オツケーのメール送っちゃうね……?」

「ああ、それがいい……いや、ちよつと待て
メールじゃなくて——電話で返事をしよう」

「あ、もしもしー？ えっと、こんな時間にゴメンねー？
うん、まだ起きてたー？」

そして俺は、そんな声を聞きながら
緒花の尻に手を伸ばした。

「ぐふっ……」

ぐい



モニュモニュと柔らかな尻肉をこね回しながら、
同時に肉棒も押し当ててやる。

「あ、うん……それで、あのー……ほら、
今日カラオケでコクってくれたでしょー……？」

「……おっと」



「うん、それでね……その返事をしようと思って……
聞いて、くれる……っ」

さあ、こっちもそろそろ……。

「ええつと……わたしなんかでよければ、
その……カノジョになってあげても、いーよ……？
うん、だからその……わたしと、付き合ってください——」

さわ

ふにっ
ふにっ



「うんうん……!?」

「くっ……はっ……」

ズブズブ、と緒花の膣内に肉棒を埋めていく。

ずぶずぶ!!

「うんうん……」



様子を見ながら、ゆっくりと腰を動かしていく。

「はあ、はあ……あ、でもその前にちよつとだけいい……？
恋人になるには、条件があるんだケド……んうっ」

「あのね、わたしのお家、チョー厳しーからっ
……エッチなコトとか、ダメなんだー……」

……そう、これが俺が決めてやった条件だ。



「そっかー、よかったー……♪
んうっ……これで、今度からは恋人同士だねー……♪
『ほっ……』」

そうかそうか、受け入れたか。



「んんううっ……！ そんなっ、激しっ……
んんううっ、んんううっ、んんウウッ……！」

「おおっ、っら締まりだっ……！」

「んん」

ぬちゃ
ぬちゃ

「おにーちゃっ、だめっ……
んんううっ、んんううっ、んんうううっ……！」



「ちよつとっ、そのっ……んんううっ……！
ストレッチっ、してるっ、ただだからっ……！」

「マジでっ、気にしないでっ……ひうっ、んううっ……！
もーっ、そーゆーのじゃっ、ないってえっ……！」





「マジでっ、ストレッチっ、だよっ……？
身体、カタイからっ……んんうっ……！」

「はあっ、はあっ……よし、このまま中出しだっ……！」



「んんーっ、んんうっ、んんううーっ！
イッ、くっっ……
んんんんんんうううううう……!!」

「〜O……たO……〜」

セ……

ゴクッ!

んん……!!

ゴクッ!

「ひうつ、んんううつ……!!
だいじょーぶつ……んんううつ……!!」

「ちよつとつ、ヘンなとこつ、
つつちやつただけつ、だからあつ……!!」

びりるるる!!

セー

びんぎんぎん

びん

んうう!

俺に中出しをされながら、必死に誤魔化す緒花。



「んうっ……♪ はあ、はあ……うん、つつたの、
治った……♪ んんっ……うん、ありがとー……♪」

「はあ、はあ……」

え、こつちの声つけてけっこう途切れてたの……？
なんだ、そーだったんだあ……♪」

どろ……

どろ……

すき

ホッと、緒花がその身体から力を抜く。

すき





なるほど、音声が途切れ気味&ストレッチ
という説明を受けてそれを信じている感じか？

もちろん本当のところはわからんが、まあどうでもいい。
事実がどうだろうと、俺は緒花に生ハメ中出しするだけだ。

クスコを使った内診エッチ

そしてある日のこと……。

「ただいまー」

「よお、遅かったじゃないか」

「ごめーん、マサユキさんと話してたら遅くなっちゃった」
「なんだよ、またか？ よくもまあ話題が尽きないもんだ」



ここ最近、すっかりお決まりになったやり取りをする。

『まあいい、さっそくいつものやるぞ』

『はい……んしょと』



慣れたもので、緒花がササッと制服を脱いでいく。
裸になった緒花を、前から後ろからジロジロと眺めていく。

『今日も、彼氏とは何もしなかったようだな』

「もし、そんなの当たり前じゃーん。
毎日チェックするほどのことでもなくなーい？」

「いやいや、大事なことなんだよ。」

さて、身体の外は大丈夫そうだし……次は、中だな」



「はいはい」

慣れた様子で、緒花がテーブルの上に乗る。
さて、こつちもビデオカメラのセッティングだ。

『よいしょっつとー……はい、どーぞっ!』

これからするのは、俺と緒花にとっての日課。
彼氏くんとエロいことをしていないか膣内の確認だ。

「ふむふむ、誰かに触られた形跡はないな……
くんくん……うむ、匂いもいつも通りだ」



「もー、だからそー言ってるじゃん。はやく終わらせて、
トックンしよーよー……」

「ぐふふっ、そうするかな」

手元に置いてある袋から、ゴソゴソとクスコを取りだす。
その先端を、緒花の膣口にそっと当てて……。



「んんっ……ちゃんと入った……？」

ずっ……

ずっ……

「ぐふふっ、相変わらず綺麗なピンク色だなあ」

「んふふ……♪ だって、マジでおにーちゃんとか
エッチなコトしてないもん……♪」



「奥まで、いっぱい確認してえ……?」

「ぐふふっ、それじゃあ奥まで確認させてもらうかな」

ぬぷ

ぬぷ
ぷ

再び、袋をゴソゴソと漁る。
よしよし、あったぞお……。

「さあ、ジッとしてろよ……っ!」



「あれっ……?」

おにーちゃん、ソレなにしてるのー……?」

「いや、気にするな……ちゃんと、

中まで確認してるだけだ……はあ、はあ……」

生返事をしながら、意識はスマホ画面に集中している。
これは、スマホ接続対応のケーブル型スコープレンズ。



「ねえ、おにーちゃん……それって、
もしかしてわたしの奥まで見えちゃってるの……？」
「ぐふふっ、そうだぞ。丸見えだ」

ふふっ

「うっそ、マジでーっ……♪ ヤバーいつ、
なんかちょーハズくなってきたんだケドーっ……♪」



「濡れ濡れじゃないか。そんなに生ハメがほしいのか？」

「だってえ……んっ、はあ……見られてるって思うと、アソコがチョームズムズするんだもおん……♪」

「ぐふふっ、仕方ないやつだな
じゃあ、いつものやるぞ。今日はこのままだ」

「はーん……♪」



「緒花です……♪ 同じクラスにカレシいまーす……♪
カレシとは、まだキスもしてないです……♪」
「カレシにはゼツタイに触らせてあげないアソコに、
今からおにーちゃんの
濃厚ザーメンを出してもらいまーす……♪」

「緒花の子宮がザーメンでいっぱいになるところ、
ゆーっくり見てくださあーい……♪」



「はい、ぜんぶ言ったよおー……?」
「おにーちゃん、はやくうー……!」

「ぐふふっ! よおし、始めるかつ」

もど

もど

スマホを片付け、
クスコを引き抜いて、緒花の正面に立つ。





「あはあああつ……」

「おにーちゃんのふつといペニス、きたあああつ……」

んんん

は

ジジジ!

ズッ

「おおっ、相変わらずキツキツだなっ！
よおし、動くぞっ?」

「はあっ、ああんっ……おにーちゃん、
もっとう動いてえっ……?」

はっ

「こんなゆっくりじゃなくてえっ……
おもいつきりしてえっ……?」

「なんだ、そんなに激しいのがほしいのか?」

んっ



「こんなのじゃ物足りないからっ、
もっとイジメてほしいのおっ……」

「まったく、仕方のないエロ妹だなお前は」

「だって、エッチ大好きだもおんっ……ひあんっ、
んはあっ……だからあ、もっとすっごいのきてえっ……」
「よおし、じゃあ激しいのいくぞっ！」



「ひああああんっ……!!? これっ、これえっ……!!
これがつ、ほしかったのおっ……!!」

「相変わらず凄い濡れっぶりだなっ!
そんなに兄妹セックスが気持ちいいのかっ!」

「いいっ、いいのおっ……!! あんっ、きやあんっ……!!
兄妹セックスっ、気持ちいいっ……!!」



「俺だけじゃなくて、カメラに向かって言ってみろっ！」

「おにーちゃんとの生ハメセックスつ、サイコーに感じてますううっ……！」

「よおし、ちゃんと言えたご褒美——だっ！」

「ひあああんっ……!!? これっ、深いっ……!!
あんっ、きやあんっ、あはああんっ……!!」



「よおしっ、そろそろ出すぞっ！
どこに出してほしいか言ってみろっ！」

あ

やっ

いっ

「中っ、中がいいのおっ！ あんっ、ああんっ！
おクスリで赤ちゃんできないアソコにいつ、
中出しザーメンいつばいきてえっ！」

「彼氏持ちのくせに、そんなに中出しがほしいのかっ！」



「おにーちゃんの濃厚ザーメンっ、
子宮の中までドロドロにしてほしいのっー!」

「くううっ! いいだろう、出すぞっ!」

「ああっ、イクっ、わたしもイクうううっ!」





「ぐうううううううううう」

エロッ!

ふあぁっ

「あはああああああああああああああああんっ!!」

エロッ!

エロッ!

エロッ!

エロッ!

鋭敏になった亀頭の先端に、
何かがチュウチュウと吸い付いてきているような
感触が走っていく。
しばらくの間、俺は出し続けてしまうのだった。



「はぁー……はぁー……おにーちゃん、見えてるー……?」

「お、おお……バッチリ見えてるぞ……!」

楽しむ前にも確認した、緒花の子宮口——。
そこに、大量の白濁粘液がネットリと絡みついている。





妹に中出しして、子宮口を兄ザーメンでドロドロにして。
その映像を、兄妹で並んで鑑賞するというのも悪くない。
そんな未来を想像しながら、
俺はニタニタとした笑みが
止まらなくなってしまうのだった。

映画館で彼氏の隣りでエッチ

翌日の昼過ぎ。

俺は、家のある町から電車で15分ほどの距離にあるとある駅の改札前にいた。もちろん、ここが待ち合わせ場所だからだ。

緒花はすでに待っていて、先ほどからどこかソワソワと周囲を見回している。あとは、彼氏くんがくるのを待つだけだが……。



「お……？」

緒花と同じくらい若い男が、タタタツと緒花に駆け寄る。
あいつが彼氏のマサユキくんなのか、
なかなかの爽やかイケメンじゃないか。

そんな彼氏くんを見ながら、緒花はニコニコと笑顔。
……やはり、それなりに仲がいいようだな。

「おつと……」

緒花たちが歩きだしたのを確認して、
俺もその場を移動する。

さあで、ここからはもう少し近づいてみるか……。



「そ、その……今日は、どこ行くの？」

「えっとねー、

面白そーな映画があつたからそれ観たいなーって
思ってるんだー」

「そうなんだ……なんて映画？」

「んーっと……あれ、なんだっけ？　なんとかーってやつ」

「あ、あはは……なんていうか、吾妹さんらしいね」

「えへへー、そっかなー？」



「そ、その……そういうところが、
か……いい……っていうか……」

まさに初々しいカップルという感じで、周囲を歩く
大人たちからも微笑ましそうに眺められている。

「……ん」

まあいい、どうせ彼氏くんとの関係は形だけのものだ。
彼氏くんは尾行がバレないよう後をつけていき……。



「おおー、ガラガラだねー！　こんなの初めて見たっ♪」

緒花の言う通り、休日の昼過ぎだというのに
映画館内はほとんど誰もいない。



「……ちよつと失礼しますよ。席そこなんです」

彼氏の前を横切り、そのまま緒花の隣の席に座る。
もちろん、横並びでチケットを取ったのも俺だ。

「楽しみだねー、どんな映画なんだろうっ」

「え？ 吾妹さんが観たくて
チケット取ったんじゃないの？」

「あー、えーつとそうだったねー。あははー」

「え、えーと……あ、始まるみたいだよ」



周囲を窺ってみれば
チラホラといった客たちは全員大爆睡のようだ。
そして、彼氏ちゃんと緒花は……。

「すー……すー……むにゃ……」

「おおー……なるほど、そーゆーことだったのかー……」

彼氏くんが熟睡しているのをもう一度だけ確認し、
俺は緒花へと手を伸ばした。

「んむっ……れる、ちゅ……緒花、そろそろ始めるぞ」

「ぶはっ……マ、マジでやるの……？」

「んんっ……れる、ちゅっ……人、たくさんいるよ……っ」

「当たり前だ、そのために来たんだから……ぴちゅ、れる」

緒花を抱き寄せて、その唇を奪う。



「ほら、お前も触れよ……れろ、ちゅ……
小悪魔ガールになりたいんだろ？」

「ちゅ……もうボツキしてるし……れろ、ぴちや……
おにーちゃん、なんでそんなにへーきなわけ……？」

「なんだ、ガラにもなく緊張してるのか……？」



「あ、当たり前じゃん……れる、ちゅ……
ねえ、やつぱりやめよ……？ 帰ってからだしようよ……」

「ふん、いつまでも言うてられるかな……っ」

おい=
おい=

きゅ

れろっ

片手を動かして、緒花の背中側をまさぐる。



「あつ……！ も、もうっ……バカあつ……」

緒花の服を着崩させ、その乳房を露出させる。

「あつ……あつ……やだっ、
くすぐりたいっ……ふあつ……」

「んあつ……そんな触られかたしたら、
ゾクゾクッてくるっ……ふあつ……」

プルプルと揺れる乳房を指先でくすぐるたび、
緒花がピクンッと背中を反らす。



「んっ……はぁっ……どーして……あっ……
くすぐってばかりなのっ……？」

「そういう気分なんだよ……はぁ、はぁ……
ほら、お前ももっとなつてくれ……」

勃起しすぎて怒張が痛くなってきたので、
一度腰を浮かしてズボンと下着を下ろしてやる。



「ほら、いつもみたいにスツキリさせてくれよ……」

「う、うん……はあ、はあ……それじゃ、
シコシコしていくね……っ」



「んんっ、ふあっ……お、おにーちゃん……
おっぱいまだ触るのお……？」

「当たり前だろう……？
それより、もっと強く触れよ……」

「だ、だつてえ……ふあっ、はあっ……
マサユキくんが、起きたらつて思うと……」



「チツ、余計な心配ばかりしやがつて……」

まあいい、だったら気にならなくしてやるだけだ。

「おい緒花、口開けろ」



「んむうつ……!? まだ、いひなりつ……
れろ、ぴちやつ……んんうつ、んんうつ……」

「彼氏くんのことなんざ考えられなくしてやるよ……
ぴちやつ、れろ、ちゅるるうつ……」

「んんうつ……」
「んんか、激ひつ……んむうつ……」



「んふあああつ……!? 乳首っ、らめえつ……
ふああつ……んむうっ……じゅるっ……ふああつ……」

「ダメと言いなながら
手コキが激しくなってきたぞ……?」

「らっへえっ……れる、ちゅっ……おにーひゃんがつ、
激しくすゆからっ……ふあっ、んんっ、ああっ……!」

「緒花、もうそろそろ出すぞっ……!」



「ひーよっ、きへえっ……じゅるっ、れろっ……
わらひの手っ、ザーメンでいっぱいにしへえっ……!」

亀頭を重点的に、緒花の手が動き回る。

「ダメだ、出るっ……!」

「ふあっ、あっ、ああっ……ーらめっ……わらひもっ……
ぎちゃうっ……! ふあっ、あっ、ああああっ……!?!」



「ふあああああああああああああああああつ……！」

「ぐんぐんぐんぐんぐん……」



緒花はビクビクと身体を震わせながら、
小さく、絶頂の声をあげていく。

「おにーひゃんのっ、熱ひいっ……！
手がゾクゾクしてっ……
ふあっ、ふあああっ……！」

手の精液が当たる感触で感じているのか、
ゾクゾクとした震えを長引かせている緒花。



そうして、しばらく快感の波の翻弄され続け……。

「はぁー……はぁー……おにーひゃあん……
わらひ、これ欲しい……れろ、ぴちゃ……
アソコ、ムズムズすゆう……」

「いっのかぁ……っ 彼氏くんが起きると、
見られるかもしれないぞぉ……っ」



「そんなの、ろーれもいいからあ……れろ、ちゅ……
エッチしょーよお……ちゅ、びちゃ……」

「まったく、仕方のないやつだなあ……
ほら、俺に跨がれ……ぐふふっ」

「はあ、はあ……うん……っ」

服を脱ぐ手間すらもどかしいとばかりに、
自らタイツをビリッと破き――。



「あつ、あああああつ……アソコっ、広がるうっ……!」

「おお、いい濡れ具合だっ……!」

ずぶっ

△ぶっ
ぶっ

「おにーちゃん、動いていいっ……っ
ってゆーか、動くねえっ……っ!」



「ああっ……ふあっ……カタイの、擦れるうっ……
あっ、ああっ……」

「ぐふふっ、いいぞお緒花あ……
好きなだけ楽しむといい」

「あっ、ああっ……気持ち、いいっ……ふあっ、ああっ……
奥までっ、トシッて届いてるうっ……あっ、あっ……」



「あはあっ……っ はやくうっ……んっ、はあんっ……っ」

「じゃあ、俺はこっちを
可愛がつてやるとしようか」

ケツの下に隠していたソレを取りだし、
緒花の尻を弄って――



「あああああつ……!? お尻つ、
なんか入ってきたあつ……んっ、あああああつ……!」

はっ

緒花のアナルに、イボつきのバイブを挿入してやる。

はっ

「はあ、はああつ……なにこれっ、すごいっ……
お腹、パンパンになってるうっ……あつ、あああつ……!」



「ぐふっ、気持ちよさそうじゃないか」

だが、今回はここからが本番だ。

「いくぞ緒花、スイッチ——ONだっ」





「ヤバいつ、これヤバいつてえっ………!!
あっ、んはああっ………!! お尻でブルブルしてっ……
アソコまで、震えてるうっ………んはああっ………!!」
「おにーちゃんっ、これすごいよおっ………!!
中でっ、ゴリゴリいつてるうっ………!!」

「おいおい、そんなに激しいとまずいぞ?
優しい優しい彼氏くんが起きるんじゃないのか?」

ハッ和我に返ったのだろう、
寝ている彼氏くんを見る緒花。
すぐそこで幸せそうに寝ている姿を
見つめてホッとしている。

「ぐふふっ、お前、今安心したなっ？
何か思うところはないのかよっ？」

「だ、だってえっ……きゃんっ、ああんっ……！！
マサユキくんには、
悪いコトしてるって思うけどおっ……！！」

「よおし、だったら今のうちに彼氏くんに謝っとけ」



「でもわたしっ、やつぱりコレ好きなのおっ……!!
おにーちゃんとエッチするのっ、
やめられないのおっ……!!」

「だからっ、ごめんなさあいっ……あんっ、ひあんっ……!!
わたしっ、マサユキくんのカノジョになれなくてっ、
ごめんなさあいっ……!! きゃんっ、ああんっ……!!」

気分が乗ってきたところで、俺からも腰を動かしてゆく。



「きやあんっ!? あんっ、ああんっ、ひあんっ、
あっ、あああああんっ……!」

「くおおおっ! 締まるっ……!?!」

ガザザザザ

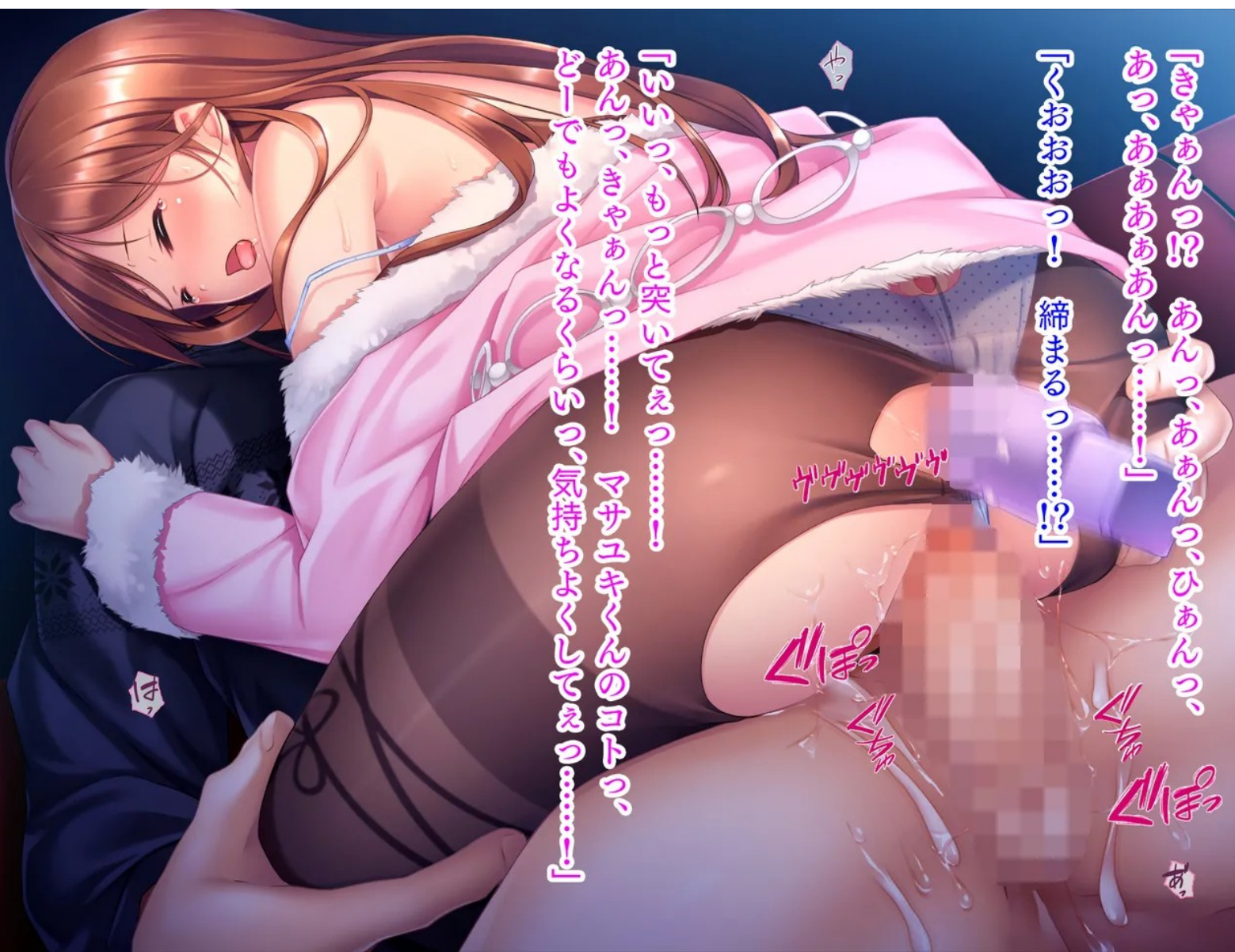
△いっ

△ちゅ

△ちゅ
△ちゅ
あ

「いっっ、もつと突いてえっ……!」

あんっ、きやあんっ……! マサユキくんのコトっ、
どーでもよくなるくらいっ、気持ちよくしてえっ……!」



「ひあああああつ……!? うそおつ、なにっ、
これえつ……! あんっ、あああんっ……!
子宮っ、ブルブル震えてるううっ……!」

「ああんっ! しゅごっつ、しゅごっつ!—
気持ちよすぎてっ、頭のなか壊れりゅうっ!
バカになっちゃううっ!」



「あああつ、もうらめえっ！ イクッ、イツちやうううっ！
頭の中っ、おにーちゃんदैいつぱいになっちやうううっ！」

「イケっ！
好きなだけイツちまえ！」

「ああああんっ!? イクッ、イクイクイクイクううっ！
あつ、あつ、あつ、あああああああつ……!!」



「ひあああああああああああああつ……!!」

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

ビクッ!

ビクッ!

びるるる!

あああああ!

ビクッ!



ああっ

「あつ、あああああつ………！ 出てるうっ………！
おにーちゃんザーメンっ、
子宮にビュッて当たってるよおっ………！」

「ああっ、まだ出るぞっ………！ くらうくらうっ………！」

すぐ隣に彼氏くんがいる状況で、
盛大な絶頂を迎える緒花。



「はあーっ……はあーっ……♪
チヨォー気持ちよかったああ……♪」

「ああ、いいセックスだったな」

「ねえ、おにーちゃん……
まだ、映画終わらないんでしょ……？
だったらあ……このまま、もっかいしょお……♪」

「仕方ないなあ……そろ、いくぞっ！」

くろ
おー
♡

くろ
おー
♡



ゆつくりと、緒花が尻を上下に動かしました。

眠っている彼氏のすぐ隣で行う背徳行為は、
映画が終了する直前まで何度も続いていくのだった……。



その後――。

「ほんつとにゴメン……せつかくの映画なのに、
ほとんど寝ちゃってたなんて……」

「ううん……気にないでらよー……」

映画館から駅へ向かうまでの道を、再び尾行していく。



「だから……また、

一緒に出かけたいなって思うんだけど、どうかなっ？」

「はあ、はあ……うん、うん……そーかもしれないね……」

膣内にはまだたっぷりのザーメンが残っているからな。
精液まみれの膣内にバイブで栓までされて、
刺激がほしくて仕方がないのだろう。

「あ、吾妹さん？ 聞してる？」

「うん……そ、そう思う……」

「聞いてないみたいだね……はああ……」

彼氏くんにとって「二世」代の言葉だったのか、
ガクッと肩を落としている。

「はあ……帰ろっか……」

「うん……そーだね……はあ、はあ……」





疼きが増しているのか、
もはや彼氏のほうを一瞥もしない緒花。

……まだまだ、緒花を他の男なんぞに渡さない。

兄妹である以上いつかは離れていくんだろうが、
それまではもっと楽しませてもらわなければ。
覚悟しろよ、緒花……ぐふふっ！

寝取り猫コス主従プレイ

そして、それから一ヶ月ほど。

「にゃんっ……にゃあんっ……♪」

ぬちや……

ぐちや

はっ

彼氏くと緒花の恋人ごっこはまだ続いており……。もちろん、俺による寝取り風プレイも続いていた。



「おにーちゃん様とのセックスつ、
気持ちいいーにやあんっ……っ」

「おい、さっそく楽しんでないでまずは報告しろよ」



やっ

あ

ん

ん

「マサユキくんはあつ……んはっ、はあつ……
今日もっ、手を繋ごうとしてきましたにやあんっ……♪」

「そろそろキスくらいはしたいとかっ、
もっとデートしたいとかっ、
トモダチに言ってるらしいですにやあんっ……♪」

「おい緒花、まさかキスくらいはと了承してないだろうな？」



「そんなコトっ、してないですにやあんっ……♪
わたしの身体はあつ、ぜんぶ、ぜーんぶっ、
おにーちゃん様のモノですにやあぁっ……♪」

「報告っ、終わりですにやあんっ……♪」

「もうコイツは邪魔なだけだ。別れ話をしろ」





「わかりましたにやあん……んっ、はあつ……えーつと、ここをこうしてえー……」

「んっ、はあつ……マサユキくん、おつかれー……」

「……もしもし？……緒花ちゃん？
あのっ……今、そっち何やってるんだいっ？」

「なにつてっ、生ハメセックスだよおっ……？
おにー、じゃなくてご主人様とエッチしてるのおっ……♪」
「はあぁっ……!？」



彼氏くん、混乱の極みといった様子だな。
仕方ない、俺が助けてやるか。

「やあマサユキくん、元気かな？
緒花と生ハメセックス中のご主人様……いや、
新しい彼氏とでも言ったほうが納得しやすいかなあ？」

「マサユキくん、わたしたち別れよお……♪
あんっ、ああんっ……エッチもキスも、
させてあげられなくてゴメンねえ……♪」



「わたしの身体って
ぜーんぶご主人様のモノだからあつ……
マサユキくんには、あげなあーいっ……♪」

「おいおい緒花、それは言い過ぎだろ？」

「っ……………」



「きゃあんっ!? やつと激しいのきたああっ!
生ハメ気持ちいいよおっ!」

ズリッ!
ズリッ!

「ひあああんっ!? それっ、それダメえっ!
お尻もいっしょに気持ちよくされるのっ、ダメなのおっ!」

「ほら、マサユキくんにも聞こえるように、
しっかり言い直すんだっ!」



「きもちいいっ、にやあんっ！
エッチ大好きな淫乱ネコ緒花のアソコおっ、
ご主人様の生ハメセックスで喜んでますにやあんっ！」

「聞こえるかいマサユキくんっ！
君の大好きな緒花はねえ、
こんなにエロい女の子なんだよっ！」



「ほしーっ！ 中出しほしーにやあーんっ！
ご主人様の濃厚ザーメンでえっ、
イカせてほしーにやあーんっ！」

「いくぞっ！ 大量にぶち撒けてやるっ！」

「きてっ、きてええっ！ 中出しっ、中出しっ！
ご主人様の濃厚ザーメンっ、
いっぱい出してくださーにやあーんっ！」





「にゃはああああああああああんっ!!」

お
あ
あ
あ
あ

びりびりッ

びりるるっ!

ピッ

ピッ

「にやっ、にやああああんっ！ 出てるうっ！
濃厚ザーメンうっ！ 緒花のアソコっ、
いっぱいにしてるにやああっ！」

ふおおあっ

セッ

セッ

びんぎ
びんぎ

「ぐふふっ、ほおら彼氏くんっ！ 聞こえるだろうっ？
緒花が中出しでイッてるよおっ！」



——さて、これで彼氏くんとは別れたわけだが。
次は何をして遊ぼうかな。
ああ、考えるだけで楽しみだ……！

くおしまい

